

## 新潟県の海底文化財に関する調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/27157">http://hdl.handle.net/2297/27157</a>

## 新潟県の海底文化財に関する調査

佐々木達夫、田崎稔也、渡邊玲

新潟県では古くからタラ場と呼ばれる海域から多量の遺物が引き揚げられており、その集成が行われてきた。行方が分からなくなったり報告がなされていない遺物も存在する。それらを再整理する作業を中心に、2009年と2010年に金沢大学考古学研究室とアジア水中考古学研究所が日本海域水中考古学会会員の協力により現地踏査や実測撮影等を実施した。調査や金沢大学考古学研究室における整理作業には竹部佑介、宮本眞晴、塩澤隆慈、松井広信、中野雄介、中野峰久、佐々木花江などが関わった。本文中にお名前を掲げた多くの方々に現地でご助力いただいた。感謝。

### 糸魚川市

能生歴史民俗資料館。名立～筒石の沖2km海底より引き揚げられた珠洲焼片口鉢5点の写真撮影・実測等を行った。片口鉢1~4はほぼ同じ形式で吉岡編年Ⅱ期からⅢ期の13世紀ごろ、片口鉢5はⅤからⅥ期で口縁に波状文で15世紀か。名立小泊の漁師が寄贈し、現在糸魚川市教育委員会蔵。未実測、未報告資料であった。5点すべてにサンゴなどの海生生物や鉄錆の付着が見られ、卸目が入る。片口鉢1(Fig.2-1)は器高14.8cm、口径29.5cm、底径12.3cm。完形の片口鉢で、卸目は13本を1条として8条を数える。使用痕は見られず、数か所に指圧痕が確認でき、外底部は静止糸切痕が見られる。片口鉢2(Fig.2-2)は、器高13.7cm、口径30.4cm、底径12cm。口縁部が破損しているため片口があったかは不明である。卸目は一本の幅が1.8mmほどで12本を1条として10条を数える。外底部は静止糸切痕が残る。片口鉢3(Fig.2-3)は、器高12.7cm、口縁部は内径31.8cm、外径33.2cm、底径11.4cm。完形の片口鉢で、卸目は一本の幅が0.8mmほどで12本を1条として8条を数える。口縁部はやや直線的であるが底部は内反り気味であり、わずかに膨らみを有する。内面上部に窯印が見られ、上越市名立沖から発見された片口鉢の窯印と形状が酷似している。片口鉢4(Fig.2-4)は器高12.4cm、口径29.6cm、底径12cm。完形の片口鉢で、卸目は一本の幅が0.6mmほどで12本を1条として8条を数え

る。外底部に静止糸切痕が残り、口縁部は歪み、直線的に外傾して開き、やや内反気味に立ち上がる。内面上部に「大」の字のような窯印がある。片口鉢5(Fig.2-5)は器高18.2cm、口径42.2cm、底径15.1cm。完形の片口鉢で、卸目は5条を1単位として櫛の幅は2.2mmほどの粗めであり、ほぼ内面全体周囲から中央に向けて入れられ、中央を過ぎた辺りで止まる。口縁部は内反状で、内面に5条単位の波状紋がめぐる。卸目、波状紋ともに一条の幅が3mm程度である。器体は外傾して開き、直線的であり、外底部は中央部がわずかに凹み、静止糸切痕が残る。片口鉢1、5は旧能生町木浦小学校、2、3は能生町公民館にそれぞれ保管されていたものである可能性が高い。(2009アンケート調査)

糸魚川市教育委員会文化振興課文化財係長・木島勉さんは、これら播鉢が保管された詳細な経緯は不明瞭というが、引き揚げた漁師が地域の学校などの施設へ寄贈し、施設が廃止になったときに処分に困り資料館へ贈ったのではないかと考えている。旧能生町の町史口絵(能生町史編纂委員会1986)に海揚がり珠洲焼の写真が2枚、巻頭に1枚掲載されている。小泊の中村家所蔵と記載されているが、小泊集落の大半は中村姓であることから、木島さんが現在調査中である。町史口絵の壺の行方は不明である。

地元漁師の方が遺物を多数引き揚げているらしく、蛸壺(Fig.5-5)はその一例で、糸魚川市浦本港沖で引き揚げられた。瀬戸内海の蛸壺に似ているが、この辺りでは蛸壺は使わず、蛸漁には木箱を使うそうである。口縁部を欠失し、轆轤成型で底部回転糸切、外面鉄釉で暗褐色を呈す。若干胴が張る筒状で内面にも鉄釉がかかる。大野雲外氏によると縄文時代の石棒らしきものが同市沖で引き揚げられている。本文中に「西頸城郡能生村の西方なる鬼伏の沖合」とあるので、現在の同市鬼伏(旧・能生町)の事例である。(大野雲外1912:583~585(巻頭に写真あり))また、徳合崎沖は糸魚川市と上越市の境目であり、大甕、中甕、播鉢などが引き揚げられている(室岡1972)。

2010年6月19日、名立・能生間にある糸魚川市藤崎海岸びびら浜約2.8kmを踏査し、染付磁器片17点を採集した(Fig.12-1)。河口に近い部分に明治、大正、昭和時代の小付片が、摩耗の激しい状態でいくつか落ちている。江戸時代の陶磁器片は未発見である。海岸

は護岸工事され、砂が数mの幅で堆積している。

### 上越市

小林秋夫氏宅で名立沖揚陸の珠洲焼秋草文水注 1 点の実測及び写真撮影を行った。それとは別に、小林氏が引き上げた旧名立公民館蔵の珠洲焼があるが現在行方不明である。廃校になった小学校に保管されている可能性があるが、未確認である。

珠洲焼水注 (Fig.3-1) は器高 15.4cm、口径 3cm、胴径 10.4cm、底径 5.6cm。注口と把手が付く。把手の上部に粘土がはみだすように付く。体部の両側に秋草文が描かれ、把手部分の背には下綾杉状の沈線文が配される。珠洲焼製品では数が少ない製品で、珠洲焼編年Ⅳ期 (14 世紀代) 頃の遺物とみられる。小林氏によれば、貝殻の付着状態は引き揚げた当時のままであるとのことであり、頸部には多毛類の棲管が集中している。水注を引き揚げたのは昭和 50 年代で、鳥ヶ首岬より北西の方角沖合約 10 マイル、水深 500 ~ 600 m の海域で、底引き網漁していたところ、泥中に埋没していたものが、網に引っ掛かったとのことである。水深が深いところであることから、天候の影響は受けていなかったと思われる。

上越市埋蔵文化財センターでは、旧名立公民館に保管されていたらしい珠洲焼壺 1 点の写真撮影・実測を行った。珠洲焼大壺 1 点 (Fig.3-2) で、器高 42cm、口径 20cm、胴径 35cm、底径 12.7cm。叩き目は綾杉状である。個人がセンターに寄託している。これまでに多く珠洲焼が引き揚げられている名立沖の引き揚げ品で、未報告資料である。担当の湯尾和広さんによると上越市埋蔵文化財センターに寄託された時期や経緯は不明である。器面に貝殻などの海生生物が付着している。

センターには市内の遺跡から出土した珠洲焼が多く所蔵される。そのなかに善光寺浜の砂浜から採集され個人が寄贈した珠洲焼中型壺 3 点、小型壺 7 点がセンター収蔵庫にある。中型壺はろくろ成形で 15 世紀か。小型壺は 14 世紀。いずれも破損のない状態である。中型壺は綾杉上の叩き文が表面全面にみられ、同一形式である。小型壺は無文が主だが、1 点のみ波状文が 5 本表面に巡る。13 世紀後半か。いずれにも貝殻の付着や破損はなく、長い間砂に埋もれていた状態を示している。これらは砂浜に埋葬された中世墓の蔵骨器であつたらしい。上越市の「善光寺ヶ浜」については、

上越市史とそれ以前の調査により、砂丘地に設営された中世墳墓として整理されている。珠洲焼の実測図 (蔵骨器) も上越市史の資料報告等に掲載されている。善光寺浜は現在、上越市直江津港の西側にある浜で、地名の由来は戦国時代まで遡る。弘治元年 (1555)、武田信玄と上杉謙信の第二次川中島合戦後、上杉謙信が春日山に帰城する際、善光寺大御堂本尊の善光寺如来を持ち帰りこの地に善光寺を建立した。善光寺如来に従って越後へ来た善光寺大御堂主栗田氏とその郎党を門前に居住させ、善光寺門前町ができた。この善光寺は上杉氏の移封とともに会津、米沢と移動し、その本尊は現在米沢市の法音寺に安置されている。上越市五智二丁目に建つ十念寺は、この善光寺如来堂跡地に建立されたもので、浜善光寺とも称される (上越市史編さん委員会 2004:381)。

上越市総合博物館では、2010 年 8 月 10 日の調査で 1960 年 (昭和 35 年) に名立漁港の猟師が引き揚げた海揚がり珠洲焼 (甕・播鉢) 2 点の写真撮影・実測を行った。担当の一越麻紀さんによると、上越市内在住の方から平成 5 年 2 月に上越市立総合博物館に寄贈されたとのことである。『名立町史』に写真が掲載された甕と似ているが細部が異なる。『名立町史』の写真は、旧名立公民館に保管されていたものである。町史掲載写真の甕は、破損した口縁部の復元状況や同じく町史掲載の中壺の窯印などから上越市総合博物館藏品と異なり、室岡博氏の第 1 群 (Fig.4-1-6) のうちの 4 点及び第 4 群の 1 点 (Fig.5-1) であると推測される。室岡氏の紹介した、第 1 群の甕 (Fig.4-1) は昭和 34 年、名立小泊の常盤常治さんが採集。名立川の河口北北西約 5,000 m、深度 160 m の岩礁付近にて引き揚げられた。室岡 1972 に紹介され、室岡 1975 に実測図も紹介されている。吉岡氏の名立沖実測図 1 に当たり、吉岡編年Ⅱ期。室岡氏による引き揚げ時の推定図でも甕は上部が割れている。口縁部径 41.5cm、器高 39.8cm、胴部最大径 48.2cm、底部径 17.5cm である。また、吉岡 1990 に写真が掲載されている上越市立総合博物館蔵の甕は、吉岡 1994 の報告している寺泊沖の甕 (Fig.6-13) と類似する。上越市立総合博物館で調査した甕が寄贈されたのは 1994 年 (平成 5 年) なので別のものであり、傷痕 (修復痕か) の状況なども食い違う。吉岡 1990 に掲載されている写真の甕は行方不明であるが、海生生物の付着状況から旧名立公民館で

保管されていたものではないかという疑いもある。ただし、文献の記載が間違っている可能性もある。第1群中甕 (Fig.4-2) は口縁部径 25.3cm、胴部最大径 32cm、器高 34.5cm、底部径 11.5cm。第1群播鉢 (Fig.4-4) は口縁部径 31.3cm、器高 12.2cm、底部径 12cm。もうひとつの第1群播鉢 (Fig.4-5) は口縁部径 32cm、器高 13.5cm、底部径 11.3cm。

上越市総合博物館の珠洲焼叩中甕 (Fig.3-4) は叩目があり、口径 43cm、高さ 42cm、底径約 16cm。焼成中に素地中の空気が膨らんで水膨れようになる。底部は平坦であったが、焼成時に歪んで一部が窪んでいる。貝殻が全面に付着しているが、現在はかなり剥落したようである。上記に述べたとおり室岡氏が 1972 年に紹介した、昭和 34 年 10 月 7 日に引き揚げられた第1群の甕に類似しているが、上越市総合博物館の甕の口縁部は破損していない。室岡 1972 に名立沖海揚がり陶磁器が 6 個 1 組みで引き揚げられたことが紹介された。伊藤・室岡・金子 1975 がさらに詳しく資料を検討し、実測図が掲載されている (Fig.4-1-6)。

上越市総合博物館珠洲焼播鉢 (Fig.4-7) は片口で、口径 30.2cm、高さ 12.5cm、底径 11.6cm。内面に卸目が粗く施される。使用痕はなく、内面の口縁部分に泥分が付くが、それ以下の内面は泥が付着せずきれいで、重ねて沈んでいたことが分かる。口縁部の欠損の状況や底部拓本から、室岡氏の報告した第2群の播鉢であり、吉岡氏の名立沖実測図 7 にあたる。吉岡編年Ⅱ期。第2群は、昭和 35 年に名立小泊の亀島正行さんが引き揚げ、発見場所は第1群と同じである。泥にまみれてシャチの歯 10 本が中に入った状態で引き揚げられ、他に片口播鉢 1 個、大甕破片 1 個が一括して引き揚げられているが、それらの行方は不明である。

名立沖からは上記のものや室岡氏の報告している第1～5群、鉄錨の他、須恵器水瓶 (Fig.3-3) が引き揚げられ、糸魚川市の個人が所蔵する。名立沖水深約 200m で、口縁部に一部欠損があるものの、ほぼ完形に近い。高田平野西部で作られたものとされ、8 世紀中葉～9 世紀前葉であると推測できる (春日 2007)。そのほかにも、播鉢や小壺が多数引き揚げられるが個人売買などにより行方が不明になったものが多い (室岡 1972)。第3群は大型甕破片で昭和 35(1960) 年、名立小泊の吉永光男氏が引き揚げた。第4群は珠洲

焼小壺で、1960 年、名立町の細谷政治氏引き揚げで、旧名立公民館に保管されていたと考えられる。施文も窯印もなく成形の際のロクロ痕がはっきりと表れている (Fig.5-1)。口縁部径 10.5cm、器高 19.8cm、胴部最大径 16.8cm、頸部径 8cm、底部径 8.5cm である。第5群は大甕破片で籠目叩文である。1960 年、名立小泊の斉藤与四郎氏の引き揚げである (室岡 1972)。Fig.5-3 は名立沖で揚陸された珠洲焼甕破片であるが、これが室岡氏の報告したものの 1 つであるか、あるいは未報告の資料であるかは定かでない。

新潟県の寺崎裕助さんのご親族の家に、海揚がりの珠洲焼片口播鉢 2 点と甕破片 1 点が保管されている (Fig.5-4)。

8 月 10 日、上越市の関川西側海岸 1.6km の砂浜を踏査した。流木や枝の破片が砂浜に広がるが、陶磁器片はまったく見られない。関川が河口港であったとしても、流路方向は東側であるため、古いものは打ち寄せられないのか、あるいは砂内に埋もれているか。関川東側は直江津港であり、コンクリートで整備されているため、踏査ができない。未踏査海岸として、直江津港付近、郷津～直江津の約 4.5km、能生港～名立漁港の約 10.3km、筒石港付近、名立大橋付近が残る。

2010 年 8 月 10 日に見学した上越市内にある清里歴史民俗資料館と牧歴史民俗資料館には、海揚がり品の展示保管はない。

### 柏崎市

荒浜海岸は柏崎原発西側の 2km ほどの砂浜で、港に隣接している。生活投棄ゴミが目立ち、西の方は護岸されているところが多い。周囲に集落があり、採集された遺物は近現代の陶磁器 10 点ほどである (Fig.12-2)。高浜海岸は柏崎原発東側の 2km 程の砂浜で、生活投棄ゴミが多い。護岸施設があり、周囲には集落が存在する。近世～近現代の陶磁器数十点を採集した (Fig.12-3)。また、久保公子さんも高浜海岸で遺物を採集しており (Fig.15-4)、17～19 世紀の遺物である。長浜・大崎海岸は連続する海水浴場で砂浜である。遠浅の海で沖の一部は護岸され、漂着物は少ない。近くに河川と集落があり、表採品はそこから流出した可能性がある。近現代の陶磁器 5 点を採集した (Fig.12-4)。石地海岸は沖の一部が護岸される砂浜である。遠浅の海で漂着した生活廃棄品は波打ち際から少し離れて浜に散乱している。付近に河川があり、採集品は川からの流出

品の可能性がある。近世 1 点を含む近世から近現代の陶磁器 12 点を採集した (Fig.13-1)。

荒浜沖からは須恵器横瓶が 1 点引き揚げられ (Fig.6-1)、柏崎市立図書館中村文庫所蔵品となり、現在は柏崎市立博物館に保管されている。2010 年 2 月 14 日に金沢大学・日本海域水中考古学会が基本法量の計測、写真撮影を行い、器高 26.2cm、口径 12.6 × 12.7cm、頸部 9.8cm × 10.2cm、横幅 22cm、胴部長 33.8cm。口縁部が丸くなでられて終わっており、胴部が比較的丸みを帯びていることから奈良時代後半のものと考えられている。

また、平成 20 年に椎谷沖合 6km 地点から海底の古木回収中に同じく須恵器横瓶が 1 点引き揚げられており (Fig.6-2)、現在、三島郡出雲崎町の越後出雲崎天領の里時代館内に展示されている。2008 年 11 月 25 日引き揚げ。2010 年 2 月 14 日に日本海域水中考古学会が基本法量の計測・写真撮影を行っている。器高 28.5cm、口径 12.5cm × 12.3cm、横幅 39.7cm、胴部長 39.7cm である。

同市裏浜には磨製石斧や、勾玉などが漂着していることが確認されている (Fig.5-3)。また珠洲焼の大甕が同市大久保・徳照寺に保管されている (Fig.6-4)。

### 三島郡出雲崎町

天領出雲崎時代館に上記の椎谷沖須恵器横瓶の他、海揚げりの 4 爪鉄錨 4 本が保管・展示されている。3 本は出雲崎の海から引き揚げられ、出雲崎町の木折神社に寄進された後、出雲崎時代館に展示されている (Fig.8-1)。3 本は大中小の大きさに分かれる。他の 1 本は、2007 年秋に出雲崎町沖海底から底引き網にかかり引き揚げられた。長さ 3 m、重さ約 200kg。2009 年に脱塩処理が終わり、フジツボなどが付着したまま保存されている (Fig.8-2)。

出雲崎町内で、8 点海揚げり遺物が管理されている。いずれも寺泊タラ場から揚陸されたものである。珠洲焼片口播鉢は 2 点あり、1 点 (Fig.7-2) は口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外削ぎ状。卸目は 10 単位で、内面には竹管による円形の挿印がある。底部は静止糸切りである。もう 1 点 (Fig.7-3) は口縁が直線的に開き、端部は外削ぎ状で、卸目は「米」字状である。内面にはへらによる×印の挿印がある。珠洲焼小鉢 (Fig.7-4) は体部が直線的に開き、口縁部は内湾気味に立ち上がる。端部は、外削ぎ状を呈すが中央部が若

干へこんでいる。外面には粘土巻き上げ痕が残る。越前焼播鉢 (Fig.7-5) は体部下半から口縁部が直線的に開き、内削ぎ状を呈するが、丸く収められている。口縁部内面上部には沈線がめぐり、底部を除いて 14 条の卸目がある。越前焼大壺 (Fig.7-6) は全体的に歪んでいる。口縁部は短く外反して立ち上がり、端部は丸みを持たず、上方へ引き出されている。肩部はナデ肩で、体部上半に最大幅を持ち、やや角張っている。外面体部上半にはへら描きがある。底部には陶片が付着しており、焼成時の焼台であろう。外面には頸部下半から体部上半にかけて暗緑色の自然釉がかかっている。近世徳利 (Fig.7-7) は外面に沈線が施され、体部下半はケズリ調整、三か所が押し込まれてへこんでおり、その一か所に神像が張り付けられる。備前焼か。(出雲崎町史編さん委員会 1993)。

出雲崎漁港付近の海岸は沖が二重、三重に護岸され、海岸もコンクリートで固められている。一部に堆積した砂浜があるが漂着物は少ない。採取地付近に明らかに生活投棄品と見られる陶磁器が落ちており、表採品は付近民家からの流出品の可能性が高い。近現代の陶磁器 5 点を採集 (Fig.13-2)。井鼻海岸は沖の一部に護岸が施された砂浜で、漂着物は多く、波打ち際から離れた浜に散乱している。表採品も多く、近世数点を含む近世から近現代の陶磁器 101 点を採取した (Fig.13-3)。

### 長岡市

寺泊民俗資料館では、海揚げりの珠洲焼片口鉢 1 点と幕末の運搬船である順動丸の外輪シャフトが所蔵されている。片口鉢 (Fig.6-5) は珠洲焼編年Ⅲ期の製品で、口縁の一部を欠損する。口径 31.5cm、底径 14.5cm、器高 11.5cm を測る。8 つの卸目が放射状に施される。順動丸の外輪シャフト (Fig.6-6) は、全長が 3.25 m におよぶ。寺泊で停泊していたところを薩長軍による砲撃を受け轟沈、その後引き揚げられたものである。

寺泊沖 (弥彦山下の間瀬～出雲崎沖) 約 10km の地点は「寺泊タラ場」と呼ばれ、岡本・金子・家田・高橋 1977 によると、明治以降も含めて 43 点の揚陸遺物が確認されている (Fig.7-1、6-7-17)。種別は弥生土器・土師器・須恵器・珠洲焼・龍泉窯青磁などで、珠洲焼の播鉢や壺が圧倒的に多い。弥生土器は間瀬沖で、寺村光晴 1956 が初出。さらに『寺泊町史』の調査で 26 個の遺物について詳細な報告がなされた (戸根 1991)。珠洲焼の壺・甕・播鉢が多く、土師器、須

恵器、近世の唐津焼などがある。寺泊大河津分水沖合からも珠洲焼の片口鉢 (Fig.6-7) などが引き揚げられ報告されている (出雲崎町史編さん委員会 1993、高橋 1994)。

山田海岸は沖の一部が護岸されている砂浜で、漂着物は少ない。近現代の陶磁器 5 点を採集した (Fig.13-4)。寺泊中央海水浴場は寺泊漁港の北東に位置する砂浜で、砂浜は広く護岸されていないが漂着物は少ない。表採された遺物は少なかった。近現代の陶磁器 3 点を採集した (Fig.14-1)。野積海岸は漂着物の少ない砂浜で、遺物は採集されなかった。

### 新潟市

角海浜は聖観世音菩薩像 (Fig.8-5) が引き揚げられたとされる地点で、新潟市指定文化財に指定されている。巻町郷土資料館には松前など北方に流通した徳利を生産した窯跡がある。新潟市角田浜沖タラ場で引き揚げられた須恵器甕が 1 点保管されている (Fig.8-4)。前山 1994、山口 1978 によると、器高 56.6cm、体部最大径 52.2cm、口径 27.0cm で丸底、体部は最大径を上体において卵形状の形態。9 世紀に佐渡から越後に搬送される途中、海難によって水没したと推定されている。角田浜沖タラ場からは合計して須恵器甕が 3 点、土師器長甕が 1 点、珠洲焼播鉢が 1 点引き揚げられている。また、坪井正五郎氏が報告している「朝鮮土器」も角田浜沖の須恵器あるいは珠洲焼のことであると推測できるが、現存する角田浜沖揚陸遺物は須恵器甕 2 点 (Fig. 8-3) で巻町教育委員会が所蔵しており、巻町郷土資料館に保管されているのはそのうちの 1 点である (前山 1994、山口 1978、坪井 1911)。

新潟市歴史博物館に海揚がり珠洲焼壺が展示されている (Fig.8-6)。昭和初期に佐渡海峡で引き揚げられた。

「横井の丘ふるさと資料館」(旧豊栄市)には珠洲焼の大壺が展示されており (Fig.9-6)、2010 年 2 月 12 日の調査で実測図の作成と写真撮影を実施した。壺は旧豊栄市浦ノ入出身の畠山佑二氏 (故人) が収集した考古学コレクションの一つであり、1987 年に豊栄市立博物館へ寄贈され資料館の展示品となったものである。壺の肩には「佐渡沖海底 明治四十年」と墨書された和紙の短冊が貼られ、海揚がり品であることを明示している。内面には大きな貝殻付着痕が残り、外面を中心に水勢摩耗がみられることから、佐渡沖海底とする注記には問題が無い。口縁部の大半を欠損するも

の、形状の全形が知られ、口径 18.4cm、器高 48.3cm、底径 13.3cm を測り、口縁から肩部に軽い焼き歪みが見られる。また、器形をみると鉢造りの底部に球体形の体部を重ね、口縁を大きく外反させている。底部の鉢造りはやや厚手となり、体部の積み上げも器厚な仕上げとなっている。頸部から口唇部のヨコナデは、少し粗く外面に水引痕を残している。以上の点からこの珠洲焼の大壺は、珠洲焼編年のⅡ期 (12 世紀末～13 世紀前半) 段階の製品と推測され、鎌倉時代に能登半島の先端部で生産された貯蔵容器が、佐渡の近海を通過する海路で搬送される途中に日本海に沈んだものである。(佐々木ほか 2010)

浦浜は岩場のある砂浜。漂着物は多かったが、遺物は確認できなかった。間瀬は間瀬漁港の南側に位置する砂浜。漂着物は少なく、遺物は確認できなかった。間瀬下山海水浴場は間瀬漁港の北側に位置する砂浜で、漂着物は少ない。付近に民家と河川があり、採集品は流出品の可能性もある。年代不明の陶磁器 1 点を採集 (Fig.14-2)。また、間瀬沖は寺泊タラ場の北端に相当する。角田浜からは上記に述べたように沖合のタラ場から遺物が揚陸されているものの、遺物は確認できなかった。五十嵐浜・島見海水浴場は漂着物の少ない砂浜で、遺物は確認できなかった。青山海岸は沖の一部が護岸されている砂浜で、漂着物は藁や木枝などが多い。近現代の陶磁器 7 点を採集 (Fig.14-3)。

### 岩船郡粟島浦村

粟島西の沖合、約 5km・水深約 130m から灰釉短頸壺 1 点揚陸されている (Fig.9-10)。粟島の沖合西約 5km、水深 130m の地点で底引き網によって引き揚げられた。資料が紹介された当時は個人蔵であるが、現在も同じであるかは不明である。高さ 33.1cm、口径 15.5cm、胴部最大径 30.4cm、底径 9.5cm の短頸壺である。口頸部は短く直立し、口唇部は丸くおさまられている。肩部は撫で肩で、胴部最大幅は胴部上半にあり、長胴である。底部は揚底気味の平底である。成形は粘土紐輪積成形。器面調整は、口頸部はロクロ横ナデ、胴部上半がロクロケズリ、下半がロクロ横ナデで部分的に縦のヘラナデが加えられている。外面口頸部上半から肩部にかけては灰釉がかけられている。胎土は非常に緻密で明灰色をなし、黒色の小斑点がある。白瓷の系譜を引くものと考えられる。以上の諸点から、平安時代後期から鎌倉時代初期 (12 世

紀末～13世紀初頭)と推測されている。また、東海地方の窯で焼成された可能性が高いようである(戸根1992)。

### 村上市

村上市岩船沖からは中世の珠洲焼大甕・中甕などが6点引き揚げられている。そのうち3点は吉岡1994に掲載されている(Fig.9-1)(戸根1992、本間・計良1972、吉岡1994)。

### 佐渡市

佐渡市には海揚がりの須恵器4点と鉄錨13点が保管されている。小木海運資料館には海揚がり鉄錨が3点ある(Fig.10-3)。昭和30年代初頭まで使用されていた佐渡海峡最後の和船「幸丸」が展示されており(Fig.10-5)、鉄錨などがつながれた状態のまま展示されている(Fig.10-6)。また小木沖海底から引き揚げた御影石が展示されており、北海道函館市五稜郭の台場築造用の石材運搬船が小木港外で沈んだ時のもので、明治初期の瀬戸内産のものである(Fig.10-4)。佐渡国小木民俗博物館には鉄錨が3点所蔵されている(Fig.10-7)。佐渡博物館には海揚がり須恵器が3点と鉄錨1点がある。須恵器長頸壺は月布施沖で昭和58年に採集された(Fig.9-2)。9世紀末から10世紀と推測され、佐渡博物館へ寄贈された。須恵器甕2点は二ツ亀沖(Fig.9-3,5)。8世紀ごろの佐渡産のものである(佐藤編1988)。鉄錨1点は鷲崎沖から採集された(Fig.9-4)。両津郷土博物館には野浦沖海底遺跡の須恵器甕1点がある(Fig.9-9)(2009アンケート)。1988年に野浦沖合約5.7km、水深130mから引き揚げられた。口縁部を一部欠損しているものの、ほぼ完形に近く、9世紀末から10世紀の製品と推測される(佐藤編1988)。赤泊郷土資料館には赤泊港内から採集された鉄錨がある(Fig.9-4)。両津郷土資料館には鉄錨が5点所蔵されている(Fig.10-2)。大きさは大小に分かれる。

文献によると、二ツ亀沖からは前記須恵器甕の他、須恵器壺完形品1点が引き揚げられ、個人に売却されてしまい詳細は不明である(佐藤編1988)。松ヶ崎沖水深約260mからは縄文中期前葉の土器(新崎式)が昭和57年に引き揚げられた(Fig.9-11)(小熊1998)。また、昭和57年に真野町田切須崎沖約7.3km・水深約85mから近世の船徳利が引き揚げられ(Fig.9-7)、近世後半期の北九州産の製品と推測されている(佐藤1989a)。小木町江積沖合水深約73mから昭和60年

に土師器が引き揚げられ(Fig.9-8)、奈良時代の蛸壺と推定され、個人が所蔵している(佐藤1989b)。

相川郷土博物館、金井歴史民俗資料館、新穂歴史民俗資料館に海揚がり品の保管展示はない。

2010年の踏査では、佐渡市の海岸はコンクリートで固められるか断崖であり、陶磁器などを採集することが難しい状態である。宿根木海岸では30点(Fig.14-4)、井坪海岸では23点の遺物(Fig.14-5)をそれぞれ採集した。佐渡市宿根木海岸と佐渡市真野湾海岸で採集した陶磁器を久保公子さんが保管している。宿根木海岸のものは18～19世紀の染付などで(Fig.15-2,3)、真野湾海岸のものは17～19世紀の染付磁器や灰釉陶器などである(Fig.15-1)。

### 新潟県の海底文化財

新潟県では、上越市名立沖や寺泊・出雲崎沖などの「タラ場」と呼ばれる漁場からの遺物引き揚げが著しく目立つ。しかし全体を見ると、各タラ場以外からも佐渡周辺などにおいては一定量の引き揚げ例が存在することがわかる。

新潟県の海揚がり品で現在報告されているものは縄文土器1点、弥生土器1点、土師器2点以上、須恵器12点以上、珠洲焼59点以上、越前焼2点、鉄錨20点、石製品2点、唐津焼1点、近世陶器2点(徳利)、龍泉窯青磁1点、鉄製品1点、不明品多数である。新潟県の海揚がり品は珠洲焼を中心として数多くの遺物が引揚げられていることがわかる。珠洲焼以外は須恵器や鉄錨が多い。しかし、個人売買などにより行方不明になってしまった遺物も多数である。

タラ場は底引き網による鱈の漁獲が古くから盛んであり、遺物が多く引揚げられているため以前からよく知られている。名立タラ場で34点以上、寺泊タラ場で80点以上、角田浜沖タラ場で6点、その他、柏崎沖で3点、佐渡近海で22点、村上市岩船沖で6点、粟島近海で1点の遺物が引揚げられている。各タラ場以外の場所でも多くの遺物が見つかったことがわかる。

### 参考・引用文献

小熊博史1998「佐渡海峡から揚陸された縄文土器—縄文時代における海上交通の痕跡」、『長岡市立科学博物館研究報告』第33号:103-114,長岡市立科学博物館

- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 大野雲外 1912「海底発見の石器に就て」『人類学雑誌』第28巻 第10号 日本人類学会
- 上越市史編さん委員会編 2004『上越市史 通史編2 中世』:381 上越市
- 吉岡康暢 1990「珠洲焼から越前焼へ-北東日本海域の陶磁器交易-」『日本海と北国文化』海と列島文化シリーズ:289-317 小学館
- 室岡博 1972『頸城地方の海と海底・海浜遺跡』上越市立総合博物館教養選書第1篇、増補改訂 1981年、増補改訂 1997年 上越市立総合博物館
- 伊藤信太郎・室岡博・金子拓男 1975「名立タラバ発見の六個一組の珠洲焼」『越佐研究』第35集:36-45 新潟県人文研究会発行
- 春日真実 2007「新潟県上越市名立沖揚陸須恵器水瓶について」『新潟考古学談話会会報』第32号:7-14 新潟県考古学談話会
- 出雲崎町史編さん委員会 1993『出雲崎町史』通史編上巻 出雲崎町
- 岡本郁栄・金子拓男・家田順一郎・高橋陽子 1977「西古志の考古学的調査」『寺泊・出雲崎』新潟県文化財調査年報第16:181-203 新潟県教育委員会
- 戸根与八郎 1991「寺泊タラ場揚陸土器」『寺泊町史』資料編1 原始・古代・中世 寺泊町
- 高橋保雄 1994「寺泊沖揚陸の珠洲焼片口鉢」『新潟県考古学談話会会報』第13号 新潟県考古学談話会
- 前山精明 1994「角田浜沖タラ場」『巻町史』資料編1 考古 巻町
- 山口栄一 1978「角田浜沖タラ場の揚陸土器」『まきの木』2号 巻町郷土資料館友の会
- 坪井正五郎 1911「越後の海底から引き上げられた朝鮮土器」『人類学雑誌』第27巻第1号:38-41 日本人類学会
- 佐々木達夫、小川光彦、酒井中、垣内光次郎、九千房百合、塩澤隆慈、田崎稔也、松井広信、渡邊玲、ナンチーチーカイ、坂本圭佑 2010「日本海海域における水中文化遺産調査概報—平成21年度—」『金沢大学考古学紀要』第31号:106-147. 金沢大学考古学研究室
- 戸根与八郎 1992「新潟県粟島沖発見の灰釉短頸壺」『北越考古学』第5号:71-72 北越考古学会
- 本間嘉晴・計良勝範 1972「粟島の考古」『粟島』新潟県文化財調査年報第11 新潟県教育委員会
- 佐藤俊策編 1988「両津市野浦沖の海底から須恵器甕が揚がる」『佐渡考古歴史(会報)』第13号:21-22 佐渡考古歴史学会
- 佐藤俊策 1989a「真野湾沖の海底より近世の船徳利が揚がる」『佐渡考古歴史(会報)』第16号:33-35 佐渡考古歴史学会
- 佐藤俊策 1989b「小木半島江積沖から揚がった土師器」『佐渡考古歴史(会報)』第17号:49-50 佐渡考古歴史学会
- 名立町史編さん委員会 1997『名立町史』名立町
- 柏崎市史編さん委員会 1987『柏崎市史資料集』考古篇1 考古資料 柏崎市史編さん室
- 寺村光晴 1956「越佐海峡タラ場揚陸の弥生式土器」『貝塚』第55号 平井尚志(編集兼発行)
- 能生町史編纂委員会 1986『能生町史上巻』能生町役場



糸魚川市能生歴史民俗資料館にて





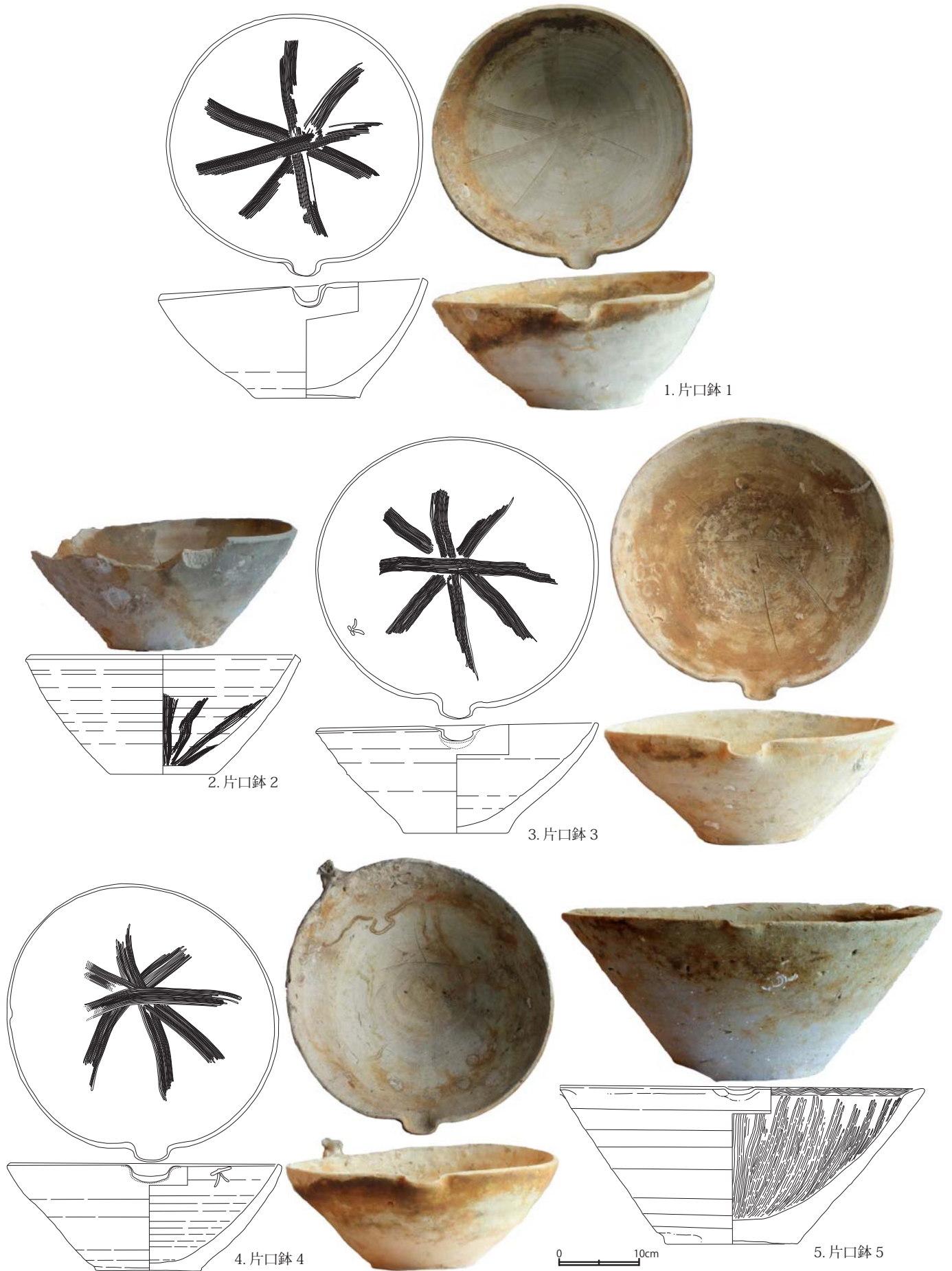
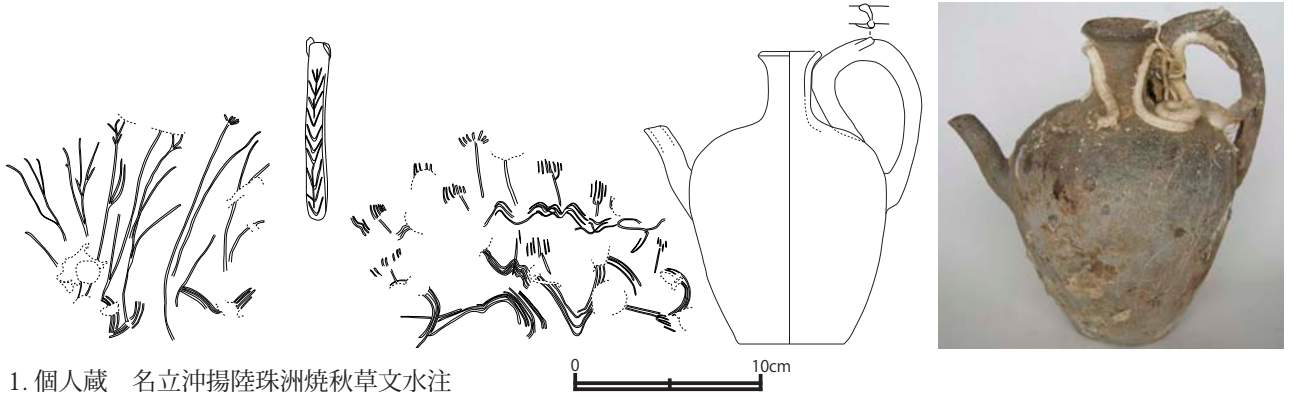


Fig.2 糸魚川市能生歴史民俗資料館所蔵 筒石沖引き揚げ珠洲焼片口鉢



1. 個人蔵 名立沖揚陸珠洲焼秋草文水注



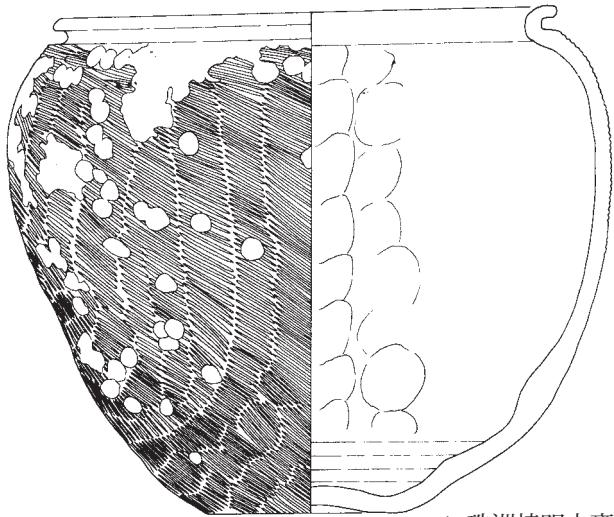
2. 上越市埋蔵文化財センター 珠洲焼叩大壺

3. 須恵器水瓶 (図面: 春日 2007 より転載)

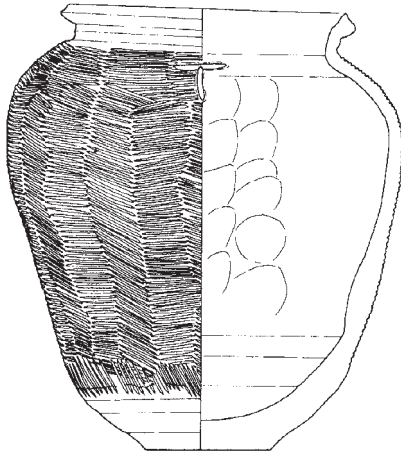


4. 上越市総合博物館 珠洲焼叩中甕

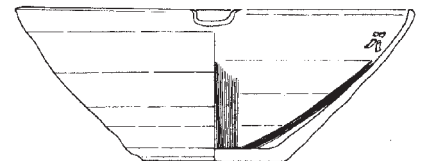
Fig.3 名立沖揚陸遺物



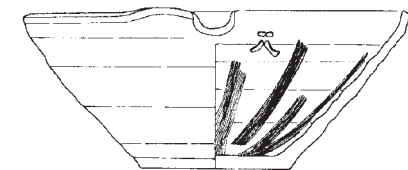
1. 珠洲焼叩中甕



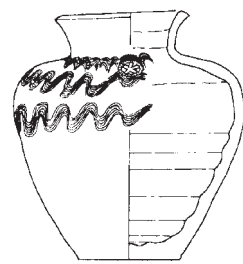
2. 珠洲焼叩中壺



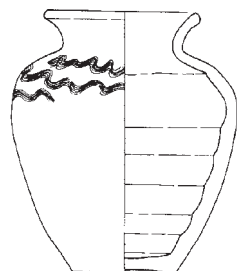
4. 珠洲焼片口大鉢



5. 珠洲焼片口大鉢

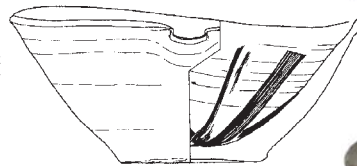


3. 珠洲焼櫛目文短胴壺



6. 珠洲焼 櫛目文長胴壺

0 10cm



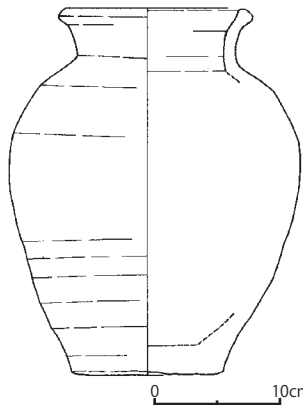
7. 珠洲焼片口大鉢 (上越市総合博物館蔵)



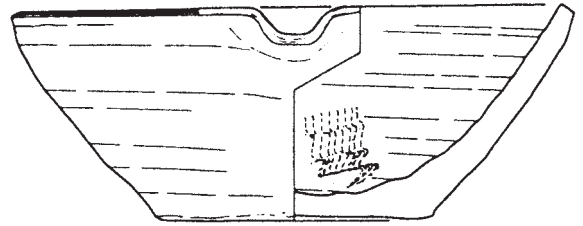
Fig.4 名立沖揚陸珠洲焼 (第1, 2群)

1~6, 図面: 伊藤・室岡・金子 1975 より転載、7, 図面: 吉岡 1994 より転載

1~6 が一括で室岡博の第1群、7が第2群



1. 珠洲焼長胴壺



2. 珠洲焼片口大鉢



3. 名立沖揚陸珠洲焼甕破片



4. 寺崎裕助氏宅保管名立沖揚陸珠洲焼片口鉢 2 点、甕破片 1 点

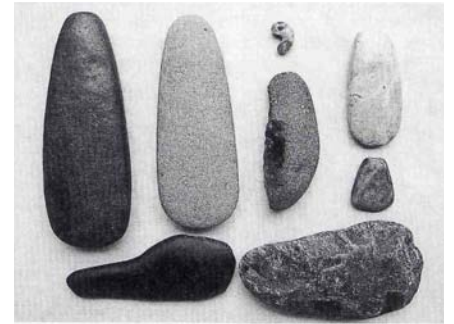


5. 糸魚川市浦本沖揚陸蛸壺 2 点

Fig.5 名立沖・浦本沖揚陸遺物  
1、2 図面：吉岡 1994 より転載、  
1 が室岡博の第 4 群



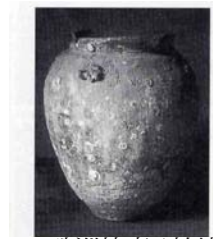
1. 柏崎市立博物館 荒浜沖出土 須恵器横瓶



3. 柏崎市裏浜に漂着した磨製石斧と勾玉



2. 出雲崎町役場保管 柏崎市椎谷沖出土 須恵器横瓶



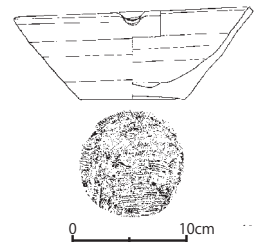
4. 珠洲焼甕 (柏崎市大久保・徳照寺)



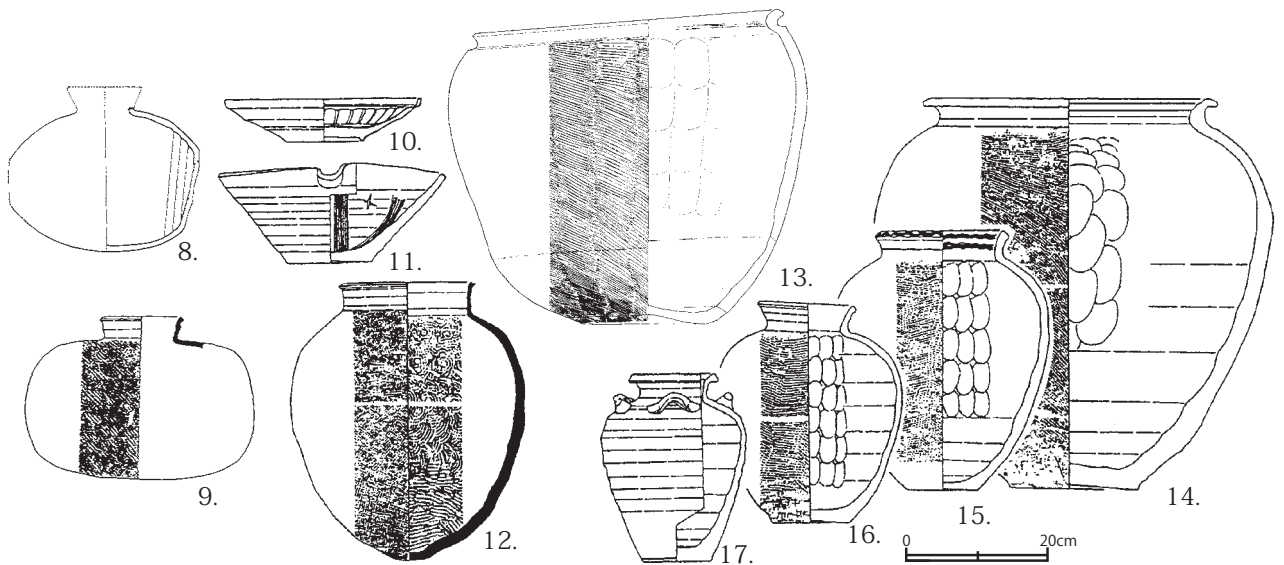
5. 寺泊民俗資料館 珠洲焼片口鉢



6. 寺泊民俗資料館 「順動丸」の外輪シャフト

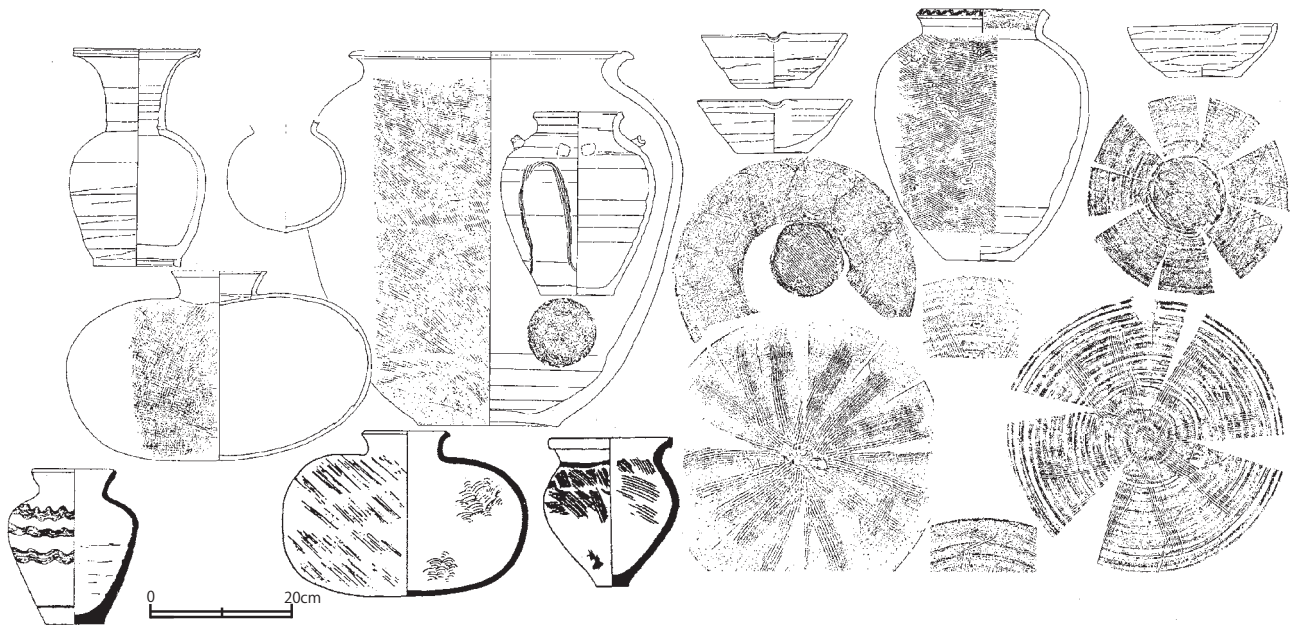


7. 大河津分水沖揚陸珠洲焼片口小鉢

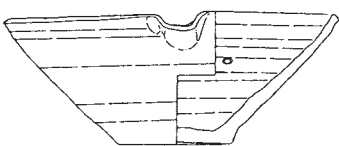


1(図面). 柏崎市史編さん委員会 1987、7. 高橋 1994、13. 吉岡 1994、10～12、14～17. 小熊,1998、8、9. 春日 2007 よりそれぞれ転載

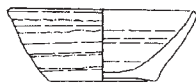
Fig.6 寺泊・出雲崎沖揚陸遺物



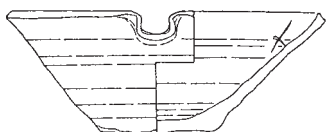
1. 寺泊・出雲崎沖揚陸遺物 岡本・金子・家田・高橋 1977 より引用



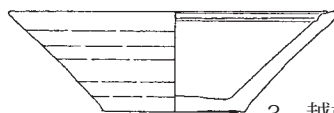
1. 珠洲焼片口播鉢



4. 珠洲焼小鉢

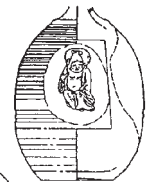


2. 珠洲焼片口播鉢

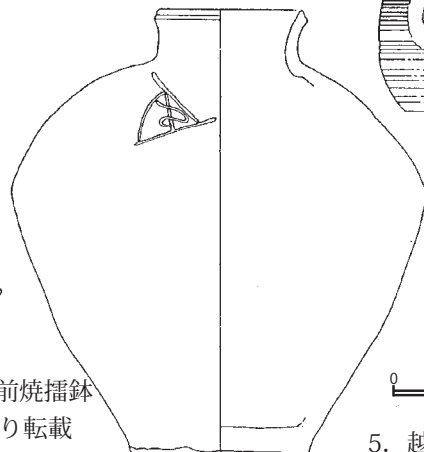


3. 越前焼播鉢

出雲崎沖引き揚げ遺物 S=1/6 出雲崎町史編さん委員会 1993 より転載



6. 近世徳利



0 10cm

5. 越前焼大壺

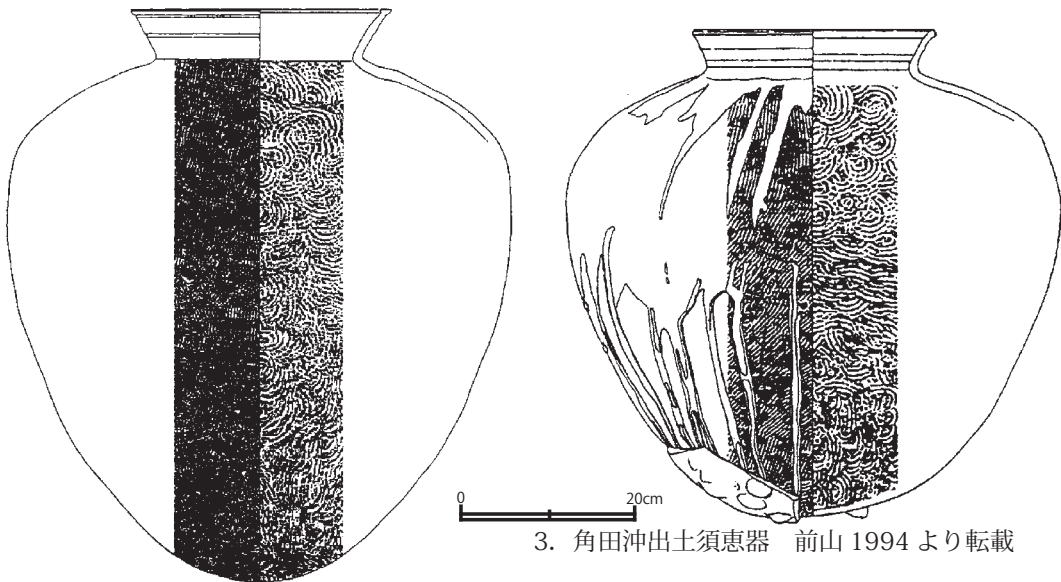
Fig.7 寺泊・出雲崎揚陸遺物



1. 天領出雲崎時代館所蔵鉄錨



2. 天領出雲崎時代館所蔵鉄錨 (脱塩済み)



3. 角田沖出土須恵器 前山 1994 より転載



4. 新潟市巻郷土資料館 角田浜沖須恵器甕



5. 伝角海濱揚陸観音像



6. 新潟市歴史博物館所蔵佐渡海峡揚陸珠洲焼壺 (複製)

Fig.8 出雲崎天領出雲崎時代館所蔵品・新潟市沖揚陸遺物





1. 岩船沖出土珠洲焼 (S=1/8) 吉岡 1994 より転載

佐渡博物館



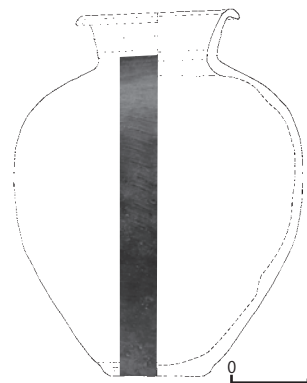
2. 月布施沖出土須恵器長頸壺



3. ニッ亀沖出土須恵器甕



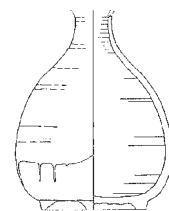
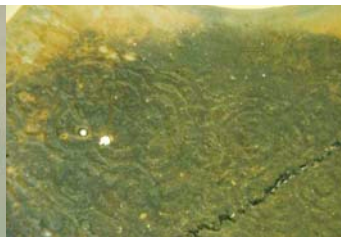
4. 鷺崎沖出土鉄錨



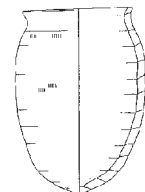
6. 新潟市横井の丘ふるさと資料館所蔵 佐渡沖引揚珠洲焼甕



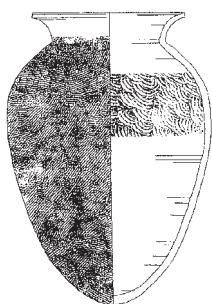
5. 須恵器甕破片及び内面青海波紋



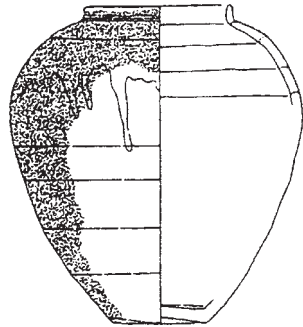
7. 真野湾沖出土船徳利 (佐藤 1989a)



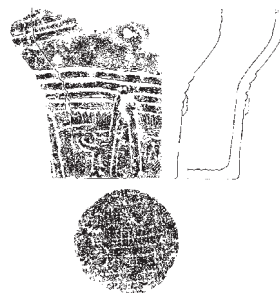
8. 江積沖出土蛸壺 (佐藤 1989b)



9. 野浦沖須恵器甕 (佐藤編 1988)



10. 粟島沖出土短頸壺 小熊 1998



11. 松ヶ崎沖 新崎式縄文土器 (小熊 1998)



Fig.9 佐渡および粟島近海揚陸遺物



1. 赤泊資料館・鉄錨



2. 両津郷土資料館・鉄錨



3. 小木海運資料館所蔵鉄錨



4. 小木海運資料館所蔵御影石



5. 小木海運資料館・和船「幸丸」



6. 小木海運資料館・和船鉄錨



7. 佐渡国小木民俗博物館所蔵鉄錨

Fig.10 佐渡島内資料館等所蔵品



糸魚川市 藤崎



柏崎市 荒浜



柏崎市 高浜



柏崎市 長浜～大崎



柏崎市 石地



三島郡出雲崎町 出雲崎漁港



三島郡出雲崎町 井鼻



長岡市 寺泊



長岡市 山田



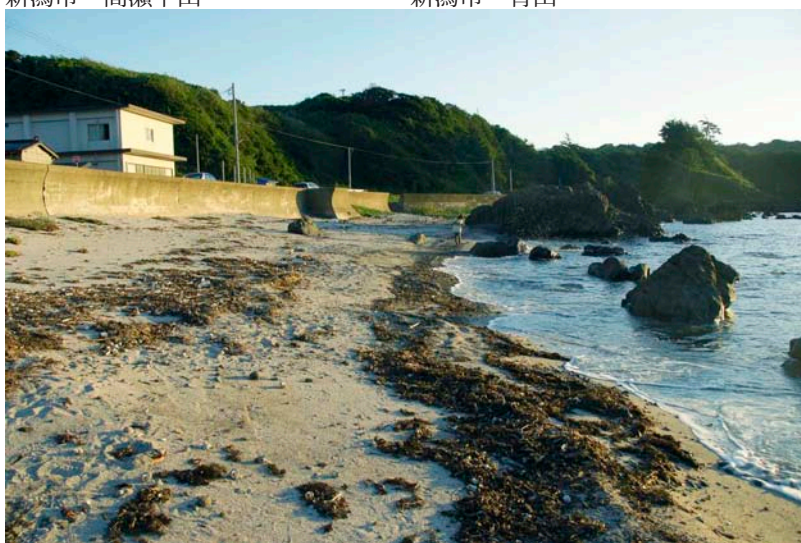
新潟市 間瀬下山



新潟市 青山



佐渡市 宿根木



佐渡市 井坪

Fig.11 新潟県海岸踏査地点



1a. 糸魚川市藤崎 . 内面



1b. 糸魚川市藤崎 . 外面



2a. 柏崎市荒浜 . 内面



2b. 柏崎市荒浜 . 外面



3a. 柏崎市高浜 . 内面



3b. 柏崎市高浜 . 外面



4a. 柏崎市長浜～大崎 . 内面



4b. 柏崎市長浜～大崎 . 外面

Fig.12 新潟県. 表面採集資料



1a. 柏崎市石地 . 内面



1b. 柏崎市石地 . 外面



2a. 三島郡出雲崎町出雲崎漁港 . 内面



2b. 三島郡出雲崎町出雲崎漁港 . 外面



3a. 三島郡出雲崎町井鼻 . 内面



3b. 三島郡出雲崎町井鼻 . 外面



4a. 長岡市山田 . 内面



4b. 長岡市山田 . 外面

Fig.13 新潟県. 表面採集資料



1. 長岡市寺泊



2. 新潟市間瀬下山



3a. 新潟市青山 . 内面



3b. 新潟市青山 . 外面



4a. 佐渡市宿根木 . 内面



4b. 佐渡市宿根木 . 外面



5a. 佐渡市井坪 . 内面



5b. 佐渡市井坪 . 外面

Fig.14 新潟県. 表面採集資料



1a. 佐渡市真野湾 . 内面



1b. 佐渡真野湾 . 外面



2a. 佐渡市宿根木 . 内面



2b. 佐渡市宿根木 . 外面



3a. 佐渡市宿根木 . 内面



3b. 佐渡市宿根木 . 外面



4a. 柏崎市高浜 . 内面



4b. 柏崎市高浜 . 外面



4c. 柏崎市高浜 . 内面



4d. 柏崎市高浜 . 外面

Fig.15 新潟県. 表面採集資料 (久保公子さん採集)